

# Think the Earth Paper

Think the Earth Paper

Think the Earth Paper vol.14  
Spring-Summer 2014

## 地球レポート・選

あたらしい学びのかたち。

El Sistema 南米からやってきた音楽教育プログラム

Diversity ピープル・デザインという発想

FabLab ソーシャル・ファブリケーションの時代へ

Learning 3.0 学びはもっと楽しく、ラディカルに

復興は本当に長期戦でまさに子どもたちの人生そのもの。  
音楽教育プログラム「エル・システマ」は、音楽で子どもたちに  
生きる「誇り」を持たせること。音楽は、子どもたちが  
困難に立ち向かう際の勇気を後押ししてくれるのではないか。  
エル・システマジャパン

### 菊川 穰

マイノリティの人々の存在を認め、誰もがあたりまえに  
混ざり合っている社会の実現の第一歩は、  
困っていきそうな人たちに声をかけ、手を貸す、  
そんな「思いやり」の行為の発動なんじゃないかと思います。  
ピープルデザイン研究所

### 須藤 シンジ

団塊の世代の人は身近にもものづくりに触れて育った方たちで、  
スキルもあります。高齢化対策をするなら  
ダイケアセンタージャやなくて「ファブラボ」に来てもらって、  
手や頭を使いながら、商品開発をしてもらえたらいいですね。  
ファブラボ鎌倉

### 渡辺 ゆうか

「ラーニング3.0」は劇場型。学習者がパフォーマーで、  
観客を喜ばせようとして夢中に行うパフォーマンスのように、  
特定の対象に向けた情熱によって深められる学びです。  
必要なのはステージに本気になれる場なんです。

ネオミュージアム／同志社女子大学現代社会学部教授

### 上田 信行



Think the Earthのホームページ内、「Think Daily」の地球レポートからあたらしい学びのかたちを考える、4本のレポート・縮小版をお届けします。より詳しい記事はホームページでご覧いただけます！  
http://www.thinktheearth.net/jp/thinkdaily/

## 地球レポート

# 音楽の力で福島復興を ～南米からやってきた エル・システマの取り組み

菊川 穰 YUTAKA KIKUGAWA

一般社団法人エル・システマジャパン

貧しい地域の子どもたちに管弦楽器を無償で与え、集団で音楽を教えることで、犯罪やドラッグの道から救ってきた南米ベネズエラの独創的な社会教育プログラム「エル・システマ」。日本では福島県相馬市で初めて導入されました。震災からの復興を目的にエル・システマジャパンを立ち上げた菊川穰さんと、この取り組みを支える人たち、そして相馬の子どもたち取材しました。

取材・文：岩井光子

「エル・システマ」は政治家で音楽家、経済学者でもあるホセ・アントニオ・アブレウ博士が1975年にベネズエラで立ち上げた音楽教育プログラム。貧しい子どもたちが暴力、ドラッグの危険にさらされることがないように、すべての子どもたちに分け隔てなく無償で管弦楽器を提供、音楽を学ぶ場を用意するというものです。裕福な人が学ぶものという印象が強かったクラシック音楽を貧しい子どもたちに率先して開放することでアブレウ博士が目指したのは、子どもたちに生きる「誇り」を持たせること。それは音楽を通じた社会変革でした。子どもたちは合奏を毎日体験することで演奏スキルの上達に留まらず、社会生活に必要な自律心や協調性を身に付け、立派な大人に成長していきました。

アブレウ博士は2009年、世界に価値あるアイデアを広めようと開かれているアメリカのカンファレンス「TED」のTED賞を受賞。エル・システマは一躍アメリカでも大きな注目を集めるようになります。今ではヨーロッパ、アジアなど世界50カ国以上に大きく広がっています。

## 福島に「エル・システマ」を

東日本大震災で津波に原発事故と幾重もの被害を受けた福島県。直後から日本ユニセフ協会の緊急支援本部のチーフコーディネーターとして被災地支援に走り回っていた菊川穰さんは、心に計り知れない傷を追った子どもたちに長期的に寄り添う支援の必要性を強く感じていました。そんな菊川さんに2011年12月、「エル・システマにできることがあるのでは？」と話をもちかけたのは、ユニセフ親善大使でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のホルン奏者、ファーガス・マックウィリアムさんでした。

マックウィリアムさんは故郷のスコットランドで自身が中心となって5年前に立ち上げたエル・システマについて話し出しました。

「少子高齢化や産業構造の変化による景気低迷といった日本と同じような問題を抱えるスコットランドでもスタッフが地域に密着する形でうまくいっている。福島の方が状況はもっと深刻だろう、ぜひやるべきだ」と。

福島では大人も子どもも将来にとらえようの

ない不安を感じていることを、菊川さんは支援活動の中で鋭く感じっていました。

「復興は本当に長期戦でまさに子どもたちの人生そのものになる。支援も一朝一夕の話ではないという思いが僕の中でも大きく膨らんでいた」と菊川さん。音楽は子どもたちが困難に立ち向かう際の勇気を後押ししてくれるのではないか——。そんな思いが募った菊川さんはついに大きな決断をします。2012年3月にエル・システマジャパンを設立。5月には相馬市と協定を交わし、その1週間後に日本ユニセフ協会を退職したのです。

## 相馬の誇り

日本初のエル・システマの実施場所を相馬に決めた理由を、菊川さんは「オーナーシップ（当事者意識）」と表現します。相馬と言えば、相馬野馬追や相馬民謡など福島を代表する伝統文化が息づく城下町。「自立心が強い土地だと始めから感じていました。サステナブルな活動をしていくには地域の人がオーナーシップを持っていることが欠かせませんが、その点、相馬なら大丈夫だと思いました」

福島は戦後まもない1950年代に小中学校に一齐に弦楽合奏のクラブが作られた音楽先進県で、当時から弦楽合奏や合唱が盛んでした。そうした環境下で子どもたちの実力を全国レベルまで押し上げたのが相馬市。60年代には中村第一小学校が全国器楽合奏コンクールで優勝し、一時代を築いたのです。相馬のエル・システマは、少なからずこの黄金期を体験した人が支えることになりました。

活動は市内小学校に既にある器楽部などに専門家を派遣し、楽器の購入や修繕を行うという後方支援から始まりました。相馬の伝統と誇りを尊重して求められることを少しずつやっていく——。それは、菊川さんがユニセフ職員としてアフリカなど途上国支援を経験する中で常に肝に銘じてきたことで、市教委の担当者とも了解し合った方向性でした。

「被災地の小学校には、毎日のように新しい支援イベントの話などが持ちかけられるのですが、先生たちは結講それで疲弊してしまう。忙



左上/エル・システマジャパンを立ち上げた菊川穰さん。右上/ジェイミー・バーンスタインさん（故バースタイン氏の長女）に弓の持ち方を教える子どもたち。©FESJ/2012/Ichiro Funakoshi 左中/米エル・システマ関係者を招いて開かれた夏期講習会。©FESJ/2012/Ichiro Funakoshi 右中/地域にしながら世界の第一線で活躍するプロの音楽家に直接指導してもらう機会もあるワクワク感はエル・システマの大きな魅力。©FESJ/2013/Mariko Tagashira 下/相馬市民会館で2013年12月に開かれたエル・システマジャパン クリスマスコンサート。写真は本番直前のリハーサルの様子。

しくて負担感がある中で受け入れてもらうということは、やはり相手が求めていることをやっていくこと。もちろん、いつもお互いの方向性が一致するわけではないですが、当事者の立場に常に立つこと。そこが重要かと」

## 再会、そして心を合わせる

相馬市では震災で458人が亡くなりました。親を亡くした子は44人。福島第一原子力発電所からの距離は45キロあり、避難区域ではありませんでしたが、市民は風評被害の影響を大きく受けています。被害の集中した沿岸部や、避難指示解除準備地域の小高区や浪江町などから避難してきている人たちも市内に多くいます。

エル・システマジャパンの活動を始めたとき、「室内で体を動かせるのがいい」と話した保護者が少なからずいたと言います。外遊びが思うようにできない育ち盛りの子どもたち。事故からまもない頃は、外で遊んで泥がついてしまった服を、母親を心配させないようにこっそり着替えてきたことがあった——。そんな胸の詰まるエピソードも耳にしました。

2013年夏からエル・システマジャパンの弦楽教室でバイオリンを始めた小学3年生の中川楓くんは震災当時、幼稚園年長組でした。幼い頃同居していたおばあちゃんの家は全壊し、卒園式も中止に。さらに原発事故を受けて秋田に避難と、本来なら小学校入学を控えてワクワクするはずの時期を、先の見えない混乱の中で過ごしました。「震災で友だちとバラバラになってしまったんです。だからエル・システマでよ

うやく再会できた友だちも多くて、子どもも親も喜んでます」と母親のこずえさん。

相馬市と協定を結び、市教委をエル・システマジャパンが支援する形で始まった活動は、2013年夏には既存の放課後クラブ活動への支援に加え、相馬子どもオーケストラの週末の弦楽教室も軌道に乗り、市内の小中学校から100人近くが参加する一大教室になりました。兄弟がいる未就学児が参加する形で年齢幅も広がり、学校や部活の枠にとらわれない子どもたちの「居場所」としての意味合いも高まっていったのです。

弦楽器の楽しさを尋ねると、多くの子どもたちが「音が重なり合ったとき！」と答えてくれます。仮設住宅など家庭環境が様々な中、仲間と音を合わせることで元気が出たり、気持ちが落ち着くといった効果は計り知れません。

取材をしながら何度も感じたのはやはり「音楽の力」。音の振動や響きを耳で、心で感じとり、手を動かして奏でるといった音楽特有の身体性。間接的な情報があふれる時代ですが、こうした「直接的」なかわりが、特に福島の子どもたちに長期的に用意されることの重要性を再認識しました。子どもたちが体験した震災や原発事故の辛さはとても短い取材で聞けるものではなく、心の傷は計り知れません。しかし、言葉ではその傷に不用意に触れてしまう可能性もあるところを、音楽は両者のコミュニケーションをふわっと和らげてくれる、そんな効果もあるのだと思いました。音楽は言葉を越え、私たちに子どもたちの豊かな感情を伝えてくれます。

3人の息子がいる須藤さん。次男が重度の脳性マヒで生まれてきたのは18年前のことでした。それまでファッションやデザイン、広告宣伝など、華やかな世界で活躍していた須藤さんが初めて福祉の世界の当事者になったとき、第一印象はあまりにも「地味」、しかも「暗い」。この地味で暗い従来の福祉の概念を壊したい！そのためにこれまで培ったファッションやデザイン、ビジネスのノウハウが役に立つのではないだろうか……。それが「ネクスタイド・エヴォリューション」を立ち上げるきっかけになりました。また、福祉の行政サービスを受ける側になって感じたことは「日本は健常者といわれる元気な人と、障害者といわれるハンディキャップを持った人たちが常に分かれているという特徴を持った国だな」という違和感。

「障害児の父として子どもの未来を考えた時に、ハンディを持っていても、いなくても、「混ざっていてあたりまえ」という社会になれば、親である僕らがいずれいなくなった時も、街に一人で出て生きていけるのではないかと思ったんです」

### 健常者も障害者も抱える「スティグマ」とは

障害者やハンディキャップと聞くと、特別に感じたり、「どう接していいかわからない」という気持ちになったりする方もいるかもしれません。心のしこりのようなこの感覚を「スティグマ」と呼びます。一方、障害を持つ方が抱える「一人でちゃんと電車に乗れるだろうか」とか「ジロジロ見られたくない」などの感覚も同じ「スティグマ」です。健康な方も障害を持つ方も抱えている「スティグマ」。これはなぜ生まれるのでしょうか。

日本では小さい頃から障害者と健常者の教室が分けられ、社会に出ても別々に過ごすことが多いと思います。例えば、車いすの方が電車に乗るシーン。日本では駅員が3人がかりで乗車の補助を行う場面を見かけます。一方欧米では、近くにいたおじさんが隣の学生に「よし、お兄ちゃんはそっち持って」なんて声を掛け合ってサポートすることが、あたりまえの光景なのだそうです。

バリアフリー化が進み、行政による福祉サポートが行き届いているかに見える日本。けれど、物理的な段差や障壁をなくすだけで双方の心の中にある「スティグマ」は消えるのでしょうか。障害者と健常者を分け、特別に扱うこれまでの

福祉の仕組み。それにより、お互いに関わり合う機会が少ないため、接し方に慣れていないこと。これが「スティグマ」の原因になっていると須藤さんは考えました。

### ダイバーシティ社会の実現に向けて

「まず、マイノリティ（社会的少数派）が抱えるさまざまなスティグマを壊す必要があります。たとえば、小さいお子さんがいるお母さんが、『映画に行きたいけれど、子どもがうるさくて迷惑かけちゃいけないから……』っていうあの感じ。あれを壊したい。いいんですよ、迷惑かけて。みんなで手伝えばいいじゃない、という雰囲気づくり。あるいは、子どもの遊び支援を行うNPOとタイアップして映画館のホワイエで子どもを預かる機能を用意しますから、とかね。大事なのは、マイノリティの抱えるスティグマや課題をひとつずつ解決し、とにかくこっちは（マジョリティ・多数派のフィールド）に出てきてもらうこと。求めたいのはこの動きなんです」

まずは具体的に混ざり合った環境を作り、双方が接する頻度を増やすことが大切だと須藤さんは言います。10年先、20年先を見据え、いずれ父となり母となる今の若い世代や、そこから先の子どもたちに届く方法や手段で発信していくこと。それをデザインすることで、よりドラマチックに新しい社会の空気や価値観が生まれる。それはまさに「意識のバリアフリー」となるのではないのでしょうか。

### 意識のバリアフリーを起こす行動のデザイン

「意識のバリアフリー」をクリエイティブに実現する思想と方法論。そこから新しい「動き」や「行動」を生み出すこと。その全てを「ピープル・デザイン」と呼びます。少数派と多数派、双方の持つ複雑な課題を解決する手段として、ファッションナブルなアイテムや、映画・スポーツといった楽しげでスティグマを感じさせないコンテンツを使うというのが「ピープル・デザイン」の考え方です。

ピープル・デザインを象徴するもののひとつに、ハンドバイクがあります。

「もともとは車いすを使っている方が、自転車のように足を使わず上半身だけで移動するための福祉機器でした。それを街で乗るオシャレな乗り物にしたのがこれです。普通の人々が『70

年代の車ブーム、80年代のオートバイブーム、2000年代の自転車ブームときたら、次はハンドバイクだね」と言って乗るみたいなの、そんな乗り物として一般に流通すれば値段が安くなるし、しかもこれを本当に必要としている障害者を持った方々にとっても、オシャレな乗り物として街に出てこられる」

かっこいいモビリティに、実は課題解決の要素が付加されていた、そんな印象で発信していくことがピープル・デザインなのです。須藤さんの言葉を聞いていると、渋谷の街を若い女の子や、おじいちゃんがハンドバイクで気持ちよく走っている光景が浮かんできます。

「それこそが、普通になる、っていうことだと思ふんです」

共感の輪は企業にも広がっています。障害をもつ人も、健常者も、共に映画を楽しむイベント「feels〜カラダで感じる上映会〜映画『時をかける少女』」。パイオニア株式会社とネクスタイドのコラボレーションにより銀座にあるパイオニアのショールームで行われています。

音声ガイダンスを劇場内にFM電波で送信し、必要な方だけがFMラジオで受信することで、一般の方とハンディキャップを持つ方が同じ空間で映画を楽しめるのが特徴です。さらにパイオニアが開発した、身体で音を感じる「体感音響システム」が各座席で体験でき、まさに「カ

ラダで感じる上映会」に。2013年度からはイタリアの自動車メーカー、アルファロメオが支援企業に変わり、さらにパワーアップしました。

### 新たな社会の空気をつくる

ダイバーシティという広い視野で世の中を見渡してみると、医学的な障害者ではないけれど、数の上では少なく、かつ何らかの障害に困っている人がたくさんいることに気づきます。一時的に日常生活に制約が生じる妊娠中の女性や赤ちゃんを抱えた女性、高齢者、それにLGBTと言われるレズ・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダーといった性的少数派の人たちもそうです。どんな人でも、いずれは老年期を迎え、高齢者となります。そう考えると私たちは、誰でも一時的な障害者、「課題多きマイノリティ」になりえるのではないのでしょうか。

「『多様性=ダイバーシティ』は自然環境に向けられるだけの概念ではなく、私たち人間も含まれるはず。マイノリティの人々の存在を認め、誰もがあたりまえに混ざり合っている社会。もしかしたら、その実現の第一歩は、困ってそうなる人たちに声をかけ、手を貸す、そんな『思いやり』の行為の発動なんじゃないかと思います。他者に対するその行為があたりまえになるとき、『意識のバリアフリー』な習慣や文化は、地域や都市の価値になると信じています」

## マイノリティがあたりまえに混ざり合う社会へ ～ピープル・デザインという発想

### 須藤シンジ SHINJI SUDO

NEXTIDEVOLUTION 代表取締役社長/ピープルデザイン研究所 代表理事

ハンディのある、なしに関わらず、多様な個性をもつ人たちが自然に混ざり合う社会(ダイバーシティ社会)の実現に向けて、ファッションやデザインという観点から課題解決に取り組むソーシャル・プロジェクトがあります。その名はネクスタイド・エヴォリューション。立ち上げのきっかけから展望まで、代表の須藤シンジさんにお話を聞きました。

取材・文：長谷部智美(Think the Earth) 写真：重松賢、岩崎祐



ピープル・デザインという考え方をもとに生まれた靴。見た目はバスケットシューズ。ストリートで人気のこのデザインに、ハンディを持つ方でも使いやすい機能性がつまっている。アシックスとネクスタイドのコラボレーションで生まれた。©nextidevolution

上/サポートする意思を表明するコミュニケーションチャーム。「多様な個性が混ざり合う街渋谷」を目指し、須藤さんと渋谷区議会議員のハセベケンさんが協力して開発した。©nextidevolution 下/電動アシストつきハンドバイク。2013年「TOKYO OUTDOOR WEEKEND」での試乗会にて。



# 仕事も遊びも自分でつくる ～ソーシャル・ファブリケーションの時代へ

## 渡辺ゆうか YUUKA WATANABE

ファブラボ鎌倉 ディレクター

今、世界中で3Dプリンターやレーザーカッターなどのデジタル工作機械が揃い、人が集う実験工房「ファブラボ (FabLab)」が急速に広がっています。ファブラボは、Fabrication Laboratory (製作のための研究室) と Fabulous Laboratory (素晴らしい研究室) を合わせてつくられた造語。なぜ今、ファブラボなのか。そこではどんなことが行われているのか。ファブラボ鎌倉に、ディレクター渡辺ゆうかさんを訪ねました。

取材・文：笹尾美和子 (Think the Earth)

ファブラボとは、マサチューセッツ工科大学 (MIT) のニール・ガーシェンフェルド教授が提唱した「個人による自由なもののづくりの可能性を広げるための実験工房」。簡単に言うと、3Dプリンターやレーザーカッターなどのデジタル工作機械が使えて、世界中にあるファブラボのネットワークと繋がり、ラボに来た人は誰でもものづくりができるオープンな施設です。

2002年にスタートしたファブラボは、今では50カ国200カ所以上、先進国、途上国を問わず草の根的に世界中に広がっています。日本にファブラボが誕生したのは2011年。東アジアでも初となる「ファブラボ鎌倉」と「ファブラボ筑波」が誕生しました。日本国内ではその他に、渋谷、仙台、関内、北加賀屋、大分の計7箇所にファブラボがあり (2014年1月時点)、今後も北海道から沖縄まで、着々とオープンの準備が進められています。

### 自分がほしいものは自分でつくるという発想

ファブラボでつくられるものは実に様々で、自分の好きなキャラクターのフィギュアや自分の身体にぴったりのリュックサックなど。大型の工作機械を揃えるスペインのファブラボではなんと家までつくられています。「(ほぼ)なんでもつくる」ファブラボの誕生で、自分のアイデアを形にすることが簡単にできるようになりました。その結果、ちょっと変わった「もの」が生みだされています。

例えば、ニール・ガーシェンフェルドの講座

「(ほぼ)なんでもつくる方法 (How to Make Anything)」の授業を受けた女性がつくった「スクリーム・ボディ」は、とても面白い作品です。「人ゴミの中にいると、急に大きな声で叫びたくなる」という変わった悩みを持っていた彼女は、防音を施した大きなカバンに向かって思いっきり叫び、録音しておいた叫びを人がいなくなった場所でリリースできるバックを製作したのです。大量生産が前提の製造業では、こういった個人の欲求だけを満たすものはつくれません。ほしいものは自分でつくる。そんなシンプルな理由から、ファブラボでは普通の人々がデジタル工作機械の使い方を覚え、技術を活用し、ものづくりを始めています。

### 伝統とテクノロジーの同居

ファブラボ鎌倉の拠点である「結の蔵」は、125年前に建てられた酒蔵で、2004年に秋田から鎌倉市に移築。土壁の土も、わざわざ秋田から持ってきて発酵させたものを使っているというから驚きです。ラボのスペース以外は住居になっていて、ここで暮らしている人たちもいます。実際に工作機械を使っているところを見せてもらうと、コンピューター上のデジタルデータに加工を施して、即座に実体として出てくるスピードの早さに驚きます。さっきまでPC上にデータがあるだけだったのに、突然カラダを持って生まれてくる、そんな感覚でした。

このファブラボ、どうして日本では最初に鎌倉につくることにしたのでしょうか？

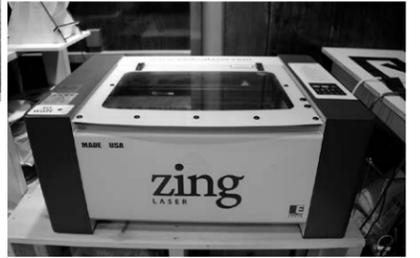
「ファブラボは地域に根付いていく役割を担



左/ファブラボ鎌倉の拠点「結の蔵」。もとは秋田県に建てられた築125年の酒蔵で、日本古来の伝統工法によって一度解体され、ここ鎌倉で再度組み立てられた。右/2階の工房スペース。木の温かみを感じる気持ちのいい空間。ここで日々ものづくりの実験が行われている。写真はどちらも©ファブラボ鎌倉



左/オープンラボ「朝ファブ」にて。リピーターの後藤さん (右) とレイジくん (左)。年齢は関係なく、わからない人がわかる人に聞く、というコミュニケーションが生まれている。右/ファブラボ鎌倉 右上/デスクトップ3Dプリンター「レプリケーター2」。印刷するような感覚で複雑な立体物を造形できる。右下/レーザー加工機。あつという間に好みのパーツが切り出される。



っています。そのため、地域性が色濃く反映されたラボのあり方がとても重要になります。日本で初めてファブラボをつくらうとした時、後からつづくラボが地域の特色が色濃く反映され、オリジナリティを出していくきっかけにする必要がありました。ひとつの紋切り型のモデルが日本に広がっていくのは、あまり面白くないですから。そして日本の歴史的な文脈もほしい。やはりその国の、その土地の文化が感じられる場所は魅力的なんです。場所の持つ力は、後からつくることができません。そこで、都心からそれほど遠くなく、歴史的な文脈と文化的な文脈を合わせ持つ鎌倉を選びました」

### おもてなしをしない、おもてなし

渡辺さんはファブラボ鎌倉には3つの役割があると定義しています。

- 1 Community Lab (コミュニティラボ)
- 2 Research Lab (リサーチラボ)
- 3 Incubation Lab (インキュベーションラボ)

「まずはコミュニティをつくらうと、1年かけてやってきました。その次に、集まる方々、コミュニティの特性をリサーチしています。実施するプログラムによって来る層が違います。ファブラボ鎌倉に通う期間、その方々がどのように変化するかを記録しています。昨年からは本格的に企業や自治体と連携して次の時代を見据えた人材育成や場、「学び」のあり方、ビジネスとして取り組む活動にも着手しています」

また、ファブラボ鎌倉では2013年の6月から、「朝ファブ」と呼ぶ、ちょっと変わったオープンラボの形式をとっています。月曜の朝9時に集合して「結の蔵」を掃除した人が、その後ラボを自由に使えるというシステム。

この「朝ファブ」のポイントは、スタッフはあえて何もしないことだと渡辺さんは言います。スタッフが何もなくても、掃除という作業を通して、リピーターの方と初めて来た参加者の関係がフラットになり、自然とコミュニケーションが生まれます。また、何度も通って技術を習得した人は、レーザーカッターなどの工作機械の使い方を教える人になります。身につけたスキルを自覚できるようにバッジを渡し、参加者ができることを誰もがわかるように見える化しています。それが自信に繋がり、初めて来た人の先生となり、どんどん成長し、自然と自分

の居場所だと思ってもらえることに成功したそうです。

「最初は私もおもてなしをしちゃっていたんです。でも、そうするとゲスト (教えてもらう側) とホスト (教える側) の関係になってしまいます。それに『ここは自分の場所ですよ。意識して下さい!』と言っても無理ですよ。ゲストの人が普通にご飯を食べたり、掃除をしたりすることで、ここは自分の場所だと自分で感じてもらうしかないんです。私はおもてなしをしないことに慣れるまで、1年かかりました」

ファブラボ鎌倉の各機材の講習会を終えた人は、蔵部 (クラブ) 会員になります。FamilyFABという家族向けのプログラムも実施しています。そこで小学校1年生の女の子が、妹の誕生日のためにレーザーカッターでパズルをつくったりしています。誰にも教わらずに、レーザーカッターの三面図を書いたりしているのですから、驚きです。「何かを学ぼう」ということではなく「自分でつくれるようになりたい」「誰かのために何かをしたい」という気持ちがものづくりをする一番シンプルな理由かもしれません。

### 地域によって個性が変わる

そして今、渡辺さんは、鎌倉だからこそ、チャレンジできることがあると考えています。

「鎌倉の周辺環境を考えると自宅や小学校が近く、都心からちょっと離れた郊外。通勤圏内ではありますが人口約17万人の地方都市の規模です。超高齢化社会をむかえるからこそ、地域はもっと面白くなっていければと思うんです。日本にいる団塊の世代の人は身近にものづくりに触れて育った方たちで、スキルもものすごくあります。でも今の状況だと、引退した後に行き場がない。それって素晴らしい資源が眠っていることだなあと感じています。もし、今後高齢化対策をするならデイケアセンターじゃなくて、ファブラボに来てもらって、手や頭を使いながら、商品開発してもらえたらいいですね。何かを開発する時、気持ちの余裕や遊び心がないと辿りつけない領域があります。そこでは、時間もお金もちょっと余裕があるアクティブシニア層の力は絶大です。そして、やる気のある若者や職人、エンジニア、海外の方々と一緒に成長できる。ファブラボはそんな場所になれると思っています」



日本でまだワークショップという言葉があまり使われていなかった1970年代から、学び・ワークショップの研究を続けてきたのが、同志社女子大学現代社会学部教授の上田信行さんです。「プレイフル・ラーニング」という言葉を掲げ、学びのオルタナティブを模索し続けてきました。プレイフルとはどのようなことなのか。上田さんは著書『プレイフル・シンキング』(宣伝会議)のなかで、こう定義しています。

- 1) プレイフルとは、真剣に向き合うこと
- 2) プレイフルとは、柔軟であること
- 3) プレイフルとは、協調のためのエンジン
- 4) プレイフルとは、実現できそうな予感にワクワクすること

「楽しいことの中にこそ学びがあります。でも楽しいだけではなく、興味のスイッチが入って、本気がかかって夢中になること。イヤイヤやっていたら、クリエイティビティなんて出てこない。だから、興味や情熱に基づく学びが大事になってきます」

そして、上田さんは学習や学びという言葉をあえてラーニング (learning) と呼んでみることで、本質的なことが見えてくるのではないかと思います。

「ラーニングという言葉には、学習、学び、勉強とさまざまなイメージがありますよね。学びという言葉が最近よく使われていますが、学校教育の響きが強いです。楽しいこととは結びつきにくいですね。ラーニングを一言で定義することは難しいけれど、経験を通して新しい世界や自分を知ること、と言えるんじゃないでしょうか。つまり、自分の可能性を切り拓いていくための機会 (opportunity) です。メディアやデザインという言葉のように、ラーニングもカタカナで広まるといいと思っています。そうすれば、新しいラーニングのイメージが広まります」

### ラーニング3.0はステージへ

新しいラーニングの世界はどこへ向かうのでしょうか。学びには3つの風景があります。

「従来の学校教育のように教師の指導を通じた学び。これが『ラーニング1.0』です。学校型と呼んでいます。次に『ラーニング2.0』の風景が現れます。人から与えられるのではなく、他者とのかかわりのなかで、自ら創り上げていくもの。工房型と呼んでいます。ワークショップやグループワークはそのひとつの形です。仕事でも、ひとりでやるのではなく協働作業をするほうが、クリエイティビティは生まれやすくなります。このときの他者との関係は対等です」

さらにその次は。

「今後は、『ラーニング3.0』が登場してきます。『3.0』は劇場型で、学習者がパフォーマーで、観客を喜ばせようとして夢に行うパフォーマンスのように、特定の対象に向けた情熱によって深められる学びです。例えば、プロのミュージシャンのライブには、いいファンがいて、いいリアクションをしてくれて、相乗効果が生まれますね。そうすると、ますます音楽に磨きがかかる。TEDもそのいい例でしょう。いいプレゼンターがいて、いい聴衆がいて相互作用を起こし、それがネットで世界に流れて多くの人を感動させる」

例えば、『ラーニング1.0』がひとりでギターを練習している情景。『2.0』でバンドを組み、『3.0』でステージに立ち、ライブをやる。

「ひとりだけでずっと練習していてもうまくなりませんね。ステージというデバイスをうまく活用して、いかに情熱をもってやるか、です。作家にとっては、芥川賞や直木賞がステージになっていますよね。今なら素人だってYouTubeで自分のパフォーマンスを世界に発信することができます。つまり、今後必要なのは、いいパ



上 / 「プレイフル・ラーニング」という言葉を掲げ、学びのオルタナティブを模索し続けてきた上田信行さん。学びに取り組むきっかけとなったのは、大学4年生のとき、日本で放映が始まったばかりの幼児向けテレビ番組「セサミストリート」に出会ったこと。「教育は楽しくていいんだ！」と衝撃を受けた。右 / ネオミュージアム内。学びのステージづくりのため、ワークショップは映像や写真で記録を残す。



2013年9月に、東京・月島のパークホームズ・イマジネーションミュージアムで行われた親子向けワークショップ「BRICK3.0」。副題は「PLAY\_PLAY\_PLAY」。上田さんと、キュレーターの大西景子さんが進行を務めた。まずは音楽で体を動かして、撮影した画像を見ながら自分の形をブロックでつくっていく。大人にとっても普段とは違う感覚が刺激される作業が楽しい。

## 学びはもっと楽しく、ラディカルに。 ～ワークショップの第一人者が考える「ラーニング3.0」

### 上田信行 NOBUYUKI UEDA

ネオミュージアム館長 / 同志社女子大学現代社会学部現代子ども学科教授

**学びは一人で向き合うもの (learning 1.0) から、他者との関わりで育まれるもの (learning 2.0) へと展開し、今さらに次の段階 (learning 3.0) にチャレンジしようとしている。同志社女子大学現代社会学部教授の上田信行さんはそう言います。ワークショップの第一人者でもある上田さんは、自ら実験的アトリエ「ネオミュージアム」も創設。学びの未来を探りに、奈良・吉野を訪ねました。**

取材・文：小泉淳子

パフォーマンスを引き出すための『ステージ＝本気になれる場』です。本気ということはプレイフルということ。そのステージをどうつくるかが課題です」

上田さんがワークショップを行うときには、必ずビデオや写真を撮影します。これには記録の意味もありますが、撮影が入ることで参加者が観客を意識して緊張感をもつようになることも、目的のひとつです。意図的にステージをつくっているわけです。

### ラディカルな問いを立てること

上田さんが自ら建てた実験的アトリエ「ネオミュージアム」では、毎年5月に、Party of the Futureというイベントを開催しています。今年のテーマは「ラディカル・ラーニング」。ラディカルと聞くと「過激」ととらえる人が多いですが、「根本的な、抜本的な」という意味で使っています。学びの本質は、ラディカルな問いを立てることだと上田さんは言います。

「学校教育だけではなく、人生においてどうラディカルな問いを立て続けるか、という姿勢が求められます。問いを立てて、形にしていこうというの、は、アートです。だからラーニングはアートでもあるんです」

いま、上田さんは自分をラーニングアーティストと名乗ります。

「学びをデザインするという言葉には、何か課題があって、その課題を解決するにはどうすればいいかという響きがありますよね。でも、ラーニングアートは、答えを見つけるのではなく、どんな問いを立てるか、が求められます」

### ワークショップはもてなしだ

ラーニングをプロデュースする資質とはなんでしょう。ワークショップのファシリテーターの条件を聞きました。

「僕はワークショップ・ファシリテーターの根底に流れる精神はもてなしだと思っています。とにかく誠心誠意、どうやったら参加者に豊かな経験をしてもらえるか、を常に考えること。それがファシリテーターのスピリットです」

そのためには俯瞰して、多角的に眺める力が必要だと言います。

「サッカーのファンタジスタと似ていると思います。ボールがどこに飛んでくるかわからないなか、彼らは瞬時に状況を判断し、閃きとイマジネーションを駆使してプレイフルに振る舞っている。彼らは、ものすごいスピードで走ることで、ゲームを俯瞰しつつコントロールしているんじゃないでしょうか」

ファシリテーターの条件としてさらに上田さんが強調したのが、「経験」や「魔法」です。

「自分のなかに経験をたくさん積むこと。経

験を省察し、意味付けしていくこと。それしかない、と思っています。マニュアルを読んだり、養成講座に参加したりすることだけでできるものではない。料理と同じで現場でやらないとだめ。だから、できるだけたくさんのワークショップに触れることが大事です。学生たちにもよく、どうすればうまく運営できるかを聞かれるのですが、説明するのはむずかしい。ワークショップをやっていると、キラキラと輝くような瞬間が生まれることがあります。「わかる？ 僕はこのシーンを見たかった！」と学生たちに叫びます。その瞬間が生まれてくる状況をデザインするにはどうすればいいか、を考えてほしいんです」

参加者をその気にさせる魔法をいかにうまくかけられるか。上田さんはワークショップの最初をダンスで始めます。それは一種の魔法。

「もちろん頭を活性化させるために身体を動かすことが大切なのですが、ダイナミックな音で音楽を鳴らして踊ることで、一体感が生まれてくるのです。最初にみんなで掃除をしたり、凍らせたグラスに冷たい飲み物を入れてサーブすれば、その場の空気感が「あっ！」と変わりますね。映画を家でビデオで見るとは違って、映画館で見るとその世界に没入していきます。このように活動や道具、そして場のデザインは、魔法のデザインでもあるのです。日常と切り離し、魔法をかけるんです」

そして、これまで数多くのワークショップを手がけてきた上田さんが言います。

「まだ誰も経験したことのないようなワークショップを創りたい。もっともっとディープな会話が沸騰する場にしたい。パーティのようなワークショップのデザイン。ラディカルでワンダフル (驚きがいっぱい) な学びの場。お題がないワークショップも新鮮ですね。これからは何をやるかではなく、どんな人が来るか、人が集まる時代になるのではないのでしょうか」

# 東日本大震災の復興支援 「忘れない基金」

震災から3年。支援先15団体のみなさんに現地の“いま”を聞きました

2011年3月11日に発生した東日本大震災から3年が過ぎました。消えることの無い悲しみを抱えながら、今なお仮設住宅や借り上げ住宅で暮らす人、ふるさとから遠く離れて暮らす人、それでも、前に進もう！と活動を続けている人がいます。「忘れない基金」では、みなさんからの寄付をとりまとめ、現地で復興活動をする人々への支援を行っています。寄付金の使い道を、支援団体の近況とともにお伝えします。

**地元農家を支える共同加工所がオープン**  
一般社団法人 いちばん星南相馬プロジェクト

福島県南相馬市で農家民宿を運営する傍ら、風評被害に悩む地元農業を支えるため、加工品開発や販売を学ぶ講座開催などの仕事創出支援も行っています。寄付金は、地域の方が共同で利用できる加工所設立に向け、厨房機材の購入に活用されました。無事加工所も開所し、今は「いちばん星牧場」の5月OPENに向けて準備中です。

加工所の本格稼働を目指して頑張っています



福島県南相馬市  
原町区金沢字追合116番地  
0244-26-9461  
寄付金額：40万円

**紙芝居を通して同郷の被災者を励ます**  
大熊町自閉症児親の会「スマイル」

福島県大熊町で、自閉症や学習・知的障害をもつ子どもの自立支援活動を行っていた団体。福島第一原発事故で全町避難を余儀なくされた児童や親のためのレクリエーション活動に寄付金が活用されました。現在は、いまだ帰れないふるさとでの民話や復興の話を通じた紙芝居を立ち上げ、各地で公演をしています。

広島での公演は大成功を収めました



福島県いわき市  
中央台飯野1-24-1  
0246-38-9430  
寄付金額：30万円

**自分で伝えたい！高校生の語り部が誕生**  
一般社団法人 おらが大槌夢広場

岩手県の大槌町で町の有志により結成。寄付は地元少年野球チームの投光器購入費に活用されました。現在もまだ目に見える復興は進んでいない状況だといえます。そこで、「被災の体験やこれからの町づくりを自分の言葉で伝えていきたい！」と、地元高校生が被災地ガイドを始めています。希望の町大槌町へぜひお越しください。

地元高校生の視点で語る被災地ガイド



岩手県上閉伊郡大槌町  
大槌第23地割字沢山37-3  
0193-55-5120  
寄付金額：40万円

**新施設は断念するも一歩ずつ前進**  
特定非営利活動法人 葵海の杜

震災後ボランティアに始まった障害者支援活動を2013年2月にNPO法人化。寄付金は南三陸町に障害者の預かり施設を作るための手続き費用などに使われましたが、建設費用の高騰などで新設を断念しました。けれども、障害児のための子ども広場「にこまる」を開催し、在宅障害者の日中預かりを行うなど、少しずつ地域に届けられています。

南三陸町さん商店街協力のハロウィン！



宮城県登米市  
中田町上沼西桜場32-1  
0220-44-4171  
寄付金額：30万円

**理想としていた介助設備が整いました**  
特定非営利活動法人 子育て支援コミュニティブチママン

福島県郡山市で子育てママの場づくりを行ってきた団体。震災後、各避難所で乳児家族の支援や簡易プレイルーム設置、マッサージなどを行っていました。活動を通じ、医療ケアが必要な障害児親子の受け入れ支援を開始。寄付金は、浴室などの施設改修費の一部として活用され、医療ケア児童の入浴関係の介助も順調に実施されています。

改修した浴室トイレが役立っています



福島県郡山市  
富田町大徳南2-23  
024-983-1925  
寄付金額：30万円

**安心して暮らせる場所ができました**  
社会福祉法人 燦々会 あすなろホーム

岩手県陸前高田市で、障害者の自立支援施設としてクッキーなどの製品を製造販売している団体。利用者の方々の住居が津波で被害をうけてしまったので、より安全な場所で、みんなで暮らせるグループホーム建設のために活用されました。2014年1月末に無事完成し、現在8名の方が利用されています。

グループホームSUNが完成しました



岩手県陸前高田市  
高田町字東和野37-1  
0192-55-2978  
寄付金額：30万円

**介護事業に加えて地域への貢献も！**  
住民互助福祉団体 ささえ愛山元

高齢者のデイサービス・訪問介護などを行っている「ささえ愛山元」への支援は、津波で流失した宅老所の高台移転費用に充てられました。施設は2013年8月に無事オープン！ 移転前の建物は集会所として無償提供し、地域の方に喜ばれています。理事長の中村怜子さんは「とにかく前を向いて進んでいます」と力強く語ってくれました。

新施設で紙コップ積み重ねゲームを楽しも



宮城県亶理郡山元町  
真庭字名生東119-1  
0223-37-3333  
寄付金額：30万円

**新たに障害児のための事業をスタート**  
特定非営利活動法人 泉里会

障害者の自立生活支援のための「ケアホームめぐみ」を運営する泉里会は、改修直後の施設を津波ですべて失いました。障害者の働く場だったイチゴハウスの再建はまだまだですが、寄付金は施設再建費用の一部として使われ、2013年5月に開所。現在は障害児の相談、預かり支援にも力を入れ、「めぐみキッズハウス」を併設しています。

ドイツからのボランティアとカード作り



宮城県泉沼市  
本吉町猪の鼻182-4  
0226-43-2411  
寄付金額：30万円

**子どもたちが「また来たい～」と大満足**  
創作農家こすもす

被災した子どもたちの笑顔を増やそうと2012年6月に始めた「こすもす公園」。昨年1年で約4万人が利用し、寄付金は公園の安全管理費用に充てられました。現在、隣接する工場の幅43mの壁に子どもたちが自由に絵を描くワークショップを行い「希望の壁画」を制作中。代表の藤井了さんは「完成した絵をぜひ見に来て！」と話してくれました。

子どもたちがワクワクする遊具がいっぱい



岩手県釜石市  
甲子町5-72  
0193-27-3366  
寄付金額：40万円

**福島・山形に避難した子どもの遊び支援**  
特定非営利活動法人 日本冒険遊び場づくり協会

全国の遊び場づくり団体のネットワーク組織。福島から山形への母子避難者支援として、野外パーク「ソトデアソビダイベスタ」設立と整備、外遊びのノウハウを現場スタッフに伝えるための専門家派遣費として活用されました。現在では、完成した外遊びパークの運営を当事者である福島のお母さんたち自身が行えるようになりました。

雪遊びや野外料理を楽しむ子どもたち



東京都世田谷区  
野沢3-14-22  
03-5430-1060  
寄付金額：30万円

**古民家カフェがつくる新しいふるさと**  
蛤浜再生プロジェクト

宮城県石巻市の蛤浜は、わずか2世帯5人が暮らす小さな浜。浜に活気を取り戻し、新しいふるさとをつくりたいという想いから、築約100年の古民家を改装したカフェはまぐり堂を拠点に活動しています。寄付金は、浜や森の安全整備に使う資材購入などに活用されました。現在は、キャンプ場やツリーハウス、漁家民宿を造っています。

企業の方や修学旅行生も森の整備に参加



宮城県石巻市  
桃浦字蛤浜18  
0225-90-2909  
寄付金額：40万円

**震災前の活動状況まで回復しています**  
特定非営利活動法人 はらまちひばり

福島県南相馬市にある障害をもつ方の就労訓練施設。震災以来、通所者のみならず、外泊ができなかったため、ストレス解消のための遠足費用として活用されました。家と作業所の往復ばかりだったみなさんも、良い気分転換ができたとのこと。現在は、作業数も震災前の状況まで回復し、利用者も増加しているそうです。

お花見遠足でリフレッシュできました



福島県南相馬市  
原町区北町522  
0244-24-4123  
寄付金額：30万円

**インターンシップで社会との繋がり実感**  
ユースサポートカレッジ 石巻NOTE

「まなぶ」「はたらく」をキーワードに、若者の「こころの自立」をサポートするために2013年に設立。寄付金は就労支援スタッフや不登校のカウンセラー強化の費用に活用されました。インターンシップで牡蠣の作業場に働く若者が漁師さんに声をかけてもらい前向きになるなど、地域の見守りをコーディネートすることで効果が表れています。

パソコンの技能アップ研修が終了！



宮城県石巻市  
鑄銭場8-23 日和ビル3階-A  
0225-25-5374  
寄付金額：40万円

**本設カフェの建設がいよいよ始まります**  
特定非営利活動法人 りくカフェ

「みんなが気軽に立ち寄れる、まちのリビングのような場所を作りたい」という思いでできた「りくカフェ」。寄付金は、現在の建物に代わる本設カフェの建設費用の一部になります。今年春には着工し8月に完成予定で、これからも地元の人のリビングとして、全国からの旅行者の立ち寄り場所として、活躍することでしょう。

地元の人や陸前高田を訪れる人で賑わう



岩手県陸前高田市  
高田町字鳴石22-9  
080-5572-2992  
寄付金額：40万円

**利用者職員とも元気に頑張っています！**  
特定非営利活動法人 ワークショップあいいい

福島県いわき市小名浜地区で、障害者の就労支援を行う団体。寄付金は、ウエスづくりの裁断機購入費として活用されました。震災後は津波で納品先が減っていたけれど、営業の甲斐ありウエスの注文も安定してきたそう。「現在、材料となる古着の収集に苦慮しておりますがアイデアを出し合っって前に進んでいきたいと思っております」

みんなで和気あいあいと作業しています



福島県いわき市  
小名浜字下町8番地  
0246-52-2522  
寄付金額：30万円



## 復興支援活動を長期的に支援する「忘れないプロジェクト」

忘れないプロジェクトウェブサイト <http://www.thinktheearth.net/jp/wasurenai/>

震災から3年が過ぎ、いまでは震災前と変わらぬ暮らしを続けている人も多くありません。一方で、いまだ日常を取り戻すための途中にある人、そうした人々と歩む活動があります。「忘れないプロジェクト」では、現地で活動を続ける団体を長期的に支援し、風化させないために次の3つの活動を行っています。

①信頼できる団体やプロジェクトの広報支援、②企業や個人の寄付を取りまとめ復興活動団体へ資金援助を行う「忘れない基金」、そして、③被災された方々や支援団体の想いに共感する個人、企業、NPO/NGOと

ともにオリジナルのプログラムをつくる「忘れないプログラム」です。ウェブサイトのトップページでは、復興支援団体のブログやニュースをRSSで収集し、各団体のいまが一目でわかる一覧を掲載。だれでも参加できるイベント情報なども発信されていますので、ぜひこまめにチェックしてみてください。

年月を経るごとに人々の関心がうすれていくなか、私たちはこれからも支援の手が届きにくい活動や小規模な活動に目を向けていきます。みなさまからの温かいご支援をお待ちしています。

## 「忘れない基金」への寄付について

企業や個人からの寄付を基金に積み立て、復興活動を行う団体へ、すぐに役立ててもらえる資金を援助します。

銀行口座：みずほ銀行 青山支店（普通）2085931  
お振込先 口座名義：一般社団法人シンク・ジ・アース 忘れない基金  
カナ表記：シャ) シンク ジ アース ワスレナイキキン

※必ず口座名を確認の上お振込ください。  
※一度お振込いただいた寄付金の返金はいたしません。  
※当基金への募金は税控除の対象になりません。あらかじめご了承ください。  
※集まったご寄付より10%を上限として本基金を継続するための必要経費に充てさせていただきます。

# Information

01

## 原子力発電のことを考えるとき、避けては通れない「放射性廃棄物」の問題をアースリウムで学ぼう

地球という奇跡の惑星を多様な視点で切り取るウェブコンテンツ、アースリウム。最新の話は放射性廃棄物です。世界では30カ国で原子力発電所（以下、原発）が稼働しており、今後も10カ国以上が導入を計画しています。でも、その原発から出る高レベル放射性廃棄物の処理施設の建設が決まっている国はどれくらいあるか、ご存知ですか？ 実は、フィンランドとスウェーデンの2カ国だけ、なのです。近づくとも数秒で死に至ると言われる高レベル放射性廃棄物は、すでに世界で25万トンあると言われていて、日本国内だけでも約2万トン。安全になるまでに数万年を要するこの負の遺産を、どう処理するのか。原子力発電所を動かすにしても、廃絶するにしても、避けては通れない問題です。処理方法として、最も有力なのが地層処分と言われる方法。地下500メートルの穴を掘り、「ガラス固化体」と呼ばれる放射性物質を何重にも閉じ込めたモノを岩盤の中に埋めてしまうという方法です。今回のアースリウムでは、日本で地層処分の基礎研究を行っている岐阜県瑞浪にある超深地層研究所を取材し、この廃棄物問題に光をあてています。（上田社一）

<http://www.ThinktheEarth.net/jp/earthrium/>



第21回 放射性廃棄物



超深地層研究所で地下300メートルの世界を見てきました

02

## 地球とつながる携帯サイトlive earth 8年間ありがとうございました！

「地球をもっと身近に感じる」ための携帯アプリ live earth および携帯サイトでのコンテンツ配信を3月末で終了いたしました。これまで約8年にわたり、多くの方にご利用いただき誠にありがとうございました。一般財団法人日本気象協会のご厚意で、お手持ちのlive earthアプリ（au版のみ）の雲画像は引き続き無料で更新ができます。

auの携帯サイトlive earthでは、情報料の一部を自然災害時の緊急支援に役立てるlive earth基金として積み立て、世界各地で災害が起きた時に、現地支援活動を行うNGOへ寄付を行ってまいりました。2013年12月には、「ウィンター ソーシャル・ギフト・キャンペーン」として東日本大震災の復興支援団体へ寄付を実施。サイト利用者みなさんに支援したい団体を選んでいただき、基金のうち合計100万円を次の3団体に届けました。

【宮城】石巻 海さくら：340,164円

【岩手】一般社団法人 三陸ひとつなぎ自然学校：258,197円

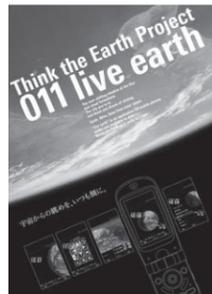
【福島】東北まち物語紙芝居化 100本プロジェクト：401,639円

サイト終了に伴い、基金の残額188,443円は「忘れない基金」へ寄付します。これまでの寄付総額は、

18,237,101円となりました。

誰もが身につける携帯電話に、宇宙から見た「今の地球の姿」を映すことで、身近な感覚で地球とつながれたら、という想いから生まれたlive earth。Think the Earthの原点でもある「宇宙から地球を見る視点を世界中の人と共有する」という考えはこれからも大切にしながら、また新たな領域に挑戦していきたいと考えています。（長谷部智美）

<http://www.thinktheearth.net/jp/liveearth/>



03

## 今年もやります。あしたの「いいね！」をつくる AQUA SOCIAL FES!! 2014

2012年に始まったトヨタのハイブリッドカー「AQUA」のソーシャルキャンペーンAQUA SOCIAL FES!! 全47都道府県で行われた水にまつわる環境再生プログラムは2年間で238回、参加者総数は22,682人となりました。Think the Earthでは3年目となる今年も鶴見川流域（東京・神奈川）と北上川流域（岩手・宮城）の2つのプロジェクトをサポートします！（関根茉帆/写真提供：AQUA SOCIAL FES!! 事務局）

<http://aquafes.jp/top/>



公式サイトでは2014年の活動スケジュールを公開中。みなさん一緒にあしたの「いいね！」を増やしませんか？

Think the Earthの上田が司会をつとめる「キーワード・トーク」。当日のアクティビティを振り返り、ほかの参加者との対話を楽しみます。



### 鶴見川流域プログラム

- 第1回：5月17日（土）日本の原風景がよみがえる！？みんなの力で川辺の自然回復にチャレンジ！
- 第2回：6月29日（日）オオムラサキの舞う森をつくろう！自然再生作業でホテルと出会う感動体験。
- 第3回：7月27日（日）真夏のアレチウリ退治でオキを守ろう！
- 第4回：8月3日（日）植生管理で原風景を取り戻そう！「バイオブリッツ」とポート体験！
- 第5回：10月13日（月・祝）エノキを植えて、オオムラサキを呼び戻そう。人も生きものも喜ぶ森に。
- 第6回：11月29日（土）源流、中流、河口を一気に回って3年間の成果を実感しよう！



鶴見川中流にはびこる特定外来植物「アレチウリ」の退治にチャレンジ！最初はなかなか抜けてくなくても、コツをつかめばこの通り。



特定のエリアにすむ生きものを採集して観察する「バイオブリッツ（生きもの全みつけ）」。人気アクティビティのひとつです！

### 北上川流域プログラム



北上川流域プログラムでは、津波の被害を受けた河口の石巻でヨシ刈りを体験。ヨシを使った門松作りにも挑戦しました。



広大な北上川でゴムボート下り！川遊びを満喫して、みんないい笑顔です^^

- 第1回：6月21日（土）星めぐりの森で草刈りをして、植樹した苗を助けよう！
- 第2回：7月13日（日）和賀川スワンプで自然観察。みんなで水辺の再生をしよう！
- 第3回：8月9日（土）川遊びのエキスパート、アクアレンジャーになろう！
- 第4回：8月31日（日）北上川でアクアレンジャーと遊ぼう！！
- 第5回：10月19日（日）星めぐりの森で植樹をして、3年間の北上川流域プログラムを振り返ろう！
- 第6回：12月6日（土）津波で被害を受けた河口の再生をめざして、ヨシ刈りをしよう！

## Think the Earth

[www.ThinktheEarth.net/jp](http://www.ThinktheEarth.net/jp)

一般社団法人Think the Earthは「エコロジーとエコノミーの共存」をテーマに2001年に発足したNPO（非営利団体）です。クリエイティブやコミュニケーションの力で、日常生活のなかで地球や世界との関わりについて考え、行動する、きっかけづくりを行っています。

環境や社会問題への無関心とあきらめの心こそ最大の課題ととらえ、ウェブサイトや書籍などで情報発信を行っているほか、企業やNPO、クリエイターとともに誰もが参加できるプロジェクトを開発・提供しています。

### 2013年度パートナー企業 (2014.3.31現在 五十音順)

e-天気.net  
株式会社NTTデータ  
KDDI株式会社  
サラヤ株式会社  
ソニー株式会社  
株式会社ノーリツ  
株式会社堀場製作所

## NTT DATA

Global IT Innovator

本紙、およびウェブメディア[Think Daily]は、株式会社NTTデータのご協力により制作しています。Think Dailyでは、世界各地で注目の人や活動を取材する「地球レポート」(年4回)や国内外のリポーターによる「地球ニュース」が好評掲載中です。

<http://www.thinktheearth.net/jp/thinkdaily/>

発行●一般社団法人Think the Earth 〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町3-1 エムワイ代官山202  
TEL 03-3464-5221 FAX 03-5459-2194 E-mail tte-office@ThinktheEarth.net  
発行日●2014年4月  
編集統括●上田社一 編集●岡野 民 編集協力●原田麻里子 長谷部智美 制作●曾我直子  
デザイン●武田英志 阿知波花恵(hoop) 印刷●株式会社日精ビーアール

### Think the Earth Paper 電子版

本紙のバックナンバーも下記ウェブサイトにて閲覧できます。

<http://www.thinktheearth.net/jp/ttepaper/>



# いきものがたり

A story of Biodiversity

Think the Earth

上映時間：35分／監督：内山 嗣康／企画・監修：Think the Earth／制作：(株)pHスタジオ、(株)IMAGICA イメージワークス／配給：(株)D&Dピクチャーズ  
協賛：ソニー株式会社

©サラヤ、グリーン・ワイズ、スペースポート、pHスタジオ、D&Dピクチャーズ

いきものはみんな星からできている

## Think the Earthによるデジタルプラネタリウム・大型映像作品「いきものがたり」。

地球にはじめて生命が誕生してから38億年、  
現在3000万種ともいわれるいきものが暮らしています。  
どのようにして、この星にいきものが生まれ、これほどの多様性を持ちえたのでしょうか？  
宇宙からの視点で地球のことを考えるThink the Earthプラネタリウム番組  
シリーズ第二弾「いきものがたり」では、この生物多様性に迫ります。  
恐竜がほろんだ時よりも、もっと速いスピードでいきものが絶滅しているといわれている現代社会。  
その原因は、わたしたち人間の生活です。  
あわただしい日常生活から、はるか137億光年の宇宙空間へ抜け出して  
そこに浮かぶ青い星と一緒に眺めてみませんか？  
なにか新しい発見があるかもしれません。

デジタルプラネタリウム

上映時間：40分(前半約15分星座解説)  
期間：2014年3月1日(土)～5月25日(日)  
場所：ベネッセ・スター・ドーム  
時間：15:00～

★16:30～「みずものがたり」も上映中。  
★休館日についてはベネッセ・スター・ドームのウェブサイトよりご確認ください。  
<http://star-dome.com/schedule/>

上映時間：45分(前半約20分星座解説)  
期間：2014年4月5日(土)～6月1日(日)  
場所：府中市郷土の森博物館  
時間：平日…4/28(月)、4/30(水)、5/1(木)、5/2(金)の14:00～ 土・日曜・祝日…14:00～

※最新の上映情報はウェブサイトをご覧ください。  
[www.thinktheearth.net/jp/planetarium/ikimonogatari/theaters.html](http://www.thinktheearth.net/jp/planetarium/ikimonogatari/theaters.html)

自主上映会を  
企画してみませんか？

デジタルプラネタリウム「いきものがたり」[みずものがたり]は、科学・天文教育だけでなく、環境教育を目的とした映像作品でもあります。全国各地で続々上映されていますが、自主上映でも観ることができます。学校・公民館・カフェ・イベントスペースなどで、仲間や先生と一緒に、自主上映会を企画してみませんか？ [【デジタルプラネタリウムプロジェクト】](#)で検索！